

御船町のカタランね



C班 担当地区：御船町
西尾ひより 竹原大旗 坂元彩華



阪神地震から5年、その先へ。
水の国くまもと
未来予想図プログラム

現状

御船の課題

①つながりの希薄化

実際に被災してみると、隠れていた地区同士・人同士といったつながりの課題が浮き彫りになった。また、移住・定住者の増加により、新たな課題も生じた。

レストラン ゆう和
震災時、山間部に住む高齢者と連絡を取るの難しかった

御船町
震災時、自主防災組織がうまく機能できていなかった

街なかギャラリー管理人
移住・定住してきた家庭との関わり方がわからない

②御船のアーカイブ

現在、行政による御船のアーカイブとして「御船町平成28年熊本地震災害記録誌」が存在する。このアーカイブの特徴は被災当初の状況や被災者の声などが豊富に記載されていることである。また、復興を反映させた方針として「御船町震災復興計画」「第6期御船町総合計画」も存在する。これらの媒体の課題として、被災から現在までの復興過程を示したものがなく、復興過程を参考にした最新版のアーカイブがないことなどが挙げられる。



思い

未来志向



野口さん
地震は悲しいよねとマイナスの方向に行ったら何も対策は進まないよね。地震がある前提でもしていかないと対策できない。



福味さん
ネガティブな話はどれだけでも出てくる。それよりも、「あの時は勉強になったよね、あれやっでよかったよね。」と前向きに捉えた方が良さ。



御船町
将来像：みんながわくわくする御船町
「地震があって大変だったけど、今すごくよくなったね。」と思える御船町をつくっていきたい。



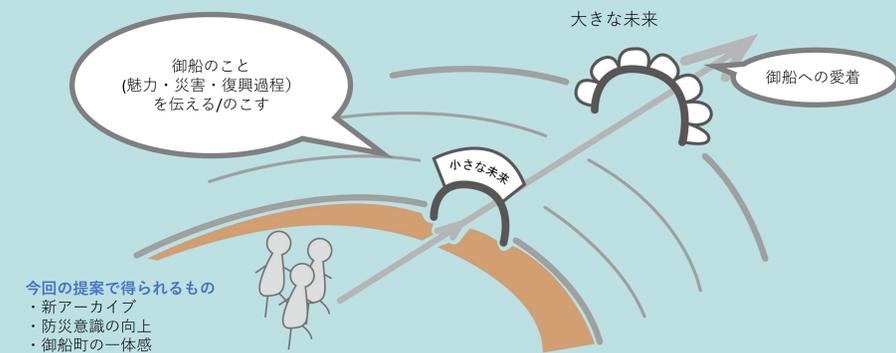
コンセプト

できるしこでつくる オールみふねのアーカイブ

アーカイブという目に見えるものを形作る。はっきりとした目的のもと、みんなが協働する。このような協働プロセスによって、個人個人のベクトルを一つの方向に近づけ、御船町全体として、御船町が描く未来への第一歩を踏み出すことを目指す。また、完成したアーカイブが、一つにまとまったベクトルを持続可能なものにする大きな要素になることを目指す。



未来予想図



記憶の継承

①被災者間に記憶の差



確かな記憶でない 記憶の補い合い

②継承内容

40 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	208	46.7
2 どちらかという必要がある	150	33.7
3 どちらとも言えない	76	17.1
4 あまり必要ない	5	1.1
5 必要ない	3	0.7
無回答 / 無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

現在、被災者間で、震災当時や復興過程の記憶に違いが生じている。熊本地震に対する御船町の姿勢や記憶内容を整合するために、記憶の補い合いを行う必要がある。また、継承すべき記憶内容として、被災者個人の見解や震災後の生き方を語り継ぐことも重要視されている。

引用： 阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度：調査報告（基礎編）
関西学院大学リポジトリ | 2020年9月20日

①教育活動「御船町ってどんなところ？」

- ✓ 未来の担い手である若者を継承プロセスに巻き込む
- ✓ 能動的なプロセス → 自分ごととして地域を捉える
- ✓ 対象校を3校にする（中学校は全域、小学校を中山間地域、市街地の校区）
→ 地域間での御船の比較、俯瞰的 or 焦点的な視点の比較
→ 多面的に御船を捉える

地元子ども達が今の御船町を「伝え手」として調査するふるさと学習

誰が	内容
小・中学校の生徒	現地を写真撮影 (ex.過去の写真と比較) 現状を映像として撮影
近所の方にインタビュー (ex.被災当初の現状) (ex.現在の状況)	



対象は小学校2校、中学校1校。その中でも小学校は校区内地域を、中学校は御船町全体を対象とする。町に向き、住民の方にインタビューしたり、過去の被災現場の写真と同じアングルで撮影したりする。また、町の現状やインタビューの様子を動画撮影する。

②記録Ⅰ「実際に発表しよう！」

- ✓ 学びの深化を狙う（関心→インプット→アウトプットのサイクル）
- ✓ 3校で共有 → 子どもたちが自分では見えなかった御船の一面を学ぶ
- ✓ 住民が子どもたちの視点を知る → 地域を見つめ直すきっかけに

教育活動における成果物を3校合同で発表

誰に	媒体
住民	紙媒体（小学生） 映像（中学生）

被災現場の比較 -八勢目鑑橋-



③語る「カタランね〜」

- ✓ 被災者としての記憶の風化を防ぐ
- ✓ ネガティブ + ポジティブの両面を語る → レジリエンスを育む
- ✓ インタラクティブな会話 → 記憶の整合、掘り起こしを促す
- ✓ BBQという震災当時の「楽しかった」環境を体現 → 震災当時を振り返りつつも、未来志向の語りができやすい

町民同士における震災関連の語り合い

内容	形式
震災前 未来 現在 被災当初 過程	時系列 事実/思い フォーマル/BBQ

STEP1

②をきっかけに、グループに分かれて震災前の日常、震災当時について語り合う。具体的なテーマなどはあえて絞らないことで、まずはそれぞれの思いや考えを共有し、「互いのありのままを理解する」ことに焦点を置く。その後、テーマを決めた上で震災当初について語り合う。

STEP2

STEP1の視点を元に、今の現状について語りあう。震災以前・震災当時からの変化を見出す。

STEP3

STEP1,2を踏まえた上で、BBQをしながら御船町としてのこれからの「課題」「ビジョン・妄想」の視点からそれぞれ語り合う

④記録Ⅱ「これが御船が誇るアーカイブ」

- ✓ ① - ③で御船町の方々が見えたい形を作り、それを行政が媒体に編集 → 無理のない役割分担を施し、体制面として持続的なものに
- ✓ 過去のみではなく未来志向も → 御船町のコンパス（パイブル）に
- ✓ 自分 or 御船町の身近な仲間が作ったもの → 自分ごととして捉える + 愛着が湧くことで手にとってもらえる媒体へ

オール御船で作った誇れるアーカイブ

誰が	内容
行政	① - ③と一緒に記録

- ・震災前から現在までを丁寧に掘る
- ・未来志向の内容（イメージ図等）を含む
- ・動画等はデジタル媒体として保存 → 紙面媒体にQRコードを記載

